

三重大学附属図書館研究開発室准教授
長澤多代先生



大学図書館にどんなイメージをお持ちですか？
図書館は皆さんの学習や研究を支える、大切な役割を担っています。そんな大学図書館の役割を、附属図書館研究開発室の長澤多代先生にお話いただきました。

また、今後皆さんが研究をしたり社会へ出て仕事をしたりするときに、自分一人では乗り越えることが難しい壁に阻まれることがあるかもしれません。そんな時、周りとの連携ができれば突破できるかも？周りとの連携のきっかけをつくる秘訣も、ご紹介いたします！

■PBLや探究型学習と大学図書館の関係
をまとめた章

― 図書を紹介をお願いします ―

大学と高校の教員を対象にしたアクティブラーニングのガイドブックで、全7巻の構成になっています。第2巻のテーマは「アクティブラーニング」としてのPBLと探究的な学習です。私はこの第2巻「問題解決や課題探究のための情報リテラシー教育」を担当しています。その重要性がますます高まっているように思います。

また、学生同士が話し合いながら学習できるラーニングコモンズを設置する大学も増えています。三重大学の附属図書館にもありますが、多様な資料や図書館サービスを活用しながら授業の準備や復習によりよく取り組める環境を整えています。

■連携のきっかけは、いたる所にあります

― 教員と図書館職員との連携を研究テーマの1つにされていますね。この図書でも、よりよい情報リテラシー教育のための授業での連携について説明されています。先生が今まで調査をされた中で、図書館職員が、連携のきっかけをどのように得て、どのように進めていったのか、事例を教えてください。

アラム・カレッジの事例があります。アラム・カレッジは、アメリカの教養カレッジで、「学ぶ方法を知る」ことを教育目標にしています。何かを覚えるというよりは自分一人で学習できるようにするという目標です。そのために、多くの授業科目でレポートやグループ研究などの探究型学習を組み入れているのですが、図書館が十分に利用されてはいませんでした。

ある時、図書館職員が、「The Bear」の著者は誰ですか？という質問が何度もレファレンスカウンター（参考調査のデスク）に寄せられることを気に留めたのです。何でだろうと思って学生にたずねると、みんな同じ先生の授業の課題を仕上げするために質問をしていたことが分かりました。そのときに、図書館職員が授業で情報の探索法について説明する機会を持てば、学生は基本的な事項を自分で調べることができ、より発展的な内容の質問を図書館職員に

当しました。アクティブラーニングといっても、多様な形態がありますが、ここでは、PBL（問題解決型学習）や探究型学習と大学図書館が提供する情報リテラシー教育との関係を説明しています。

■ラーニングコモンズや情報リテラシー教育
による大学図書館の機能強化

― 今のお話で、アクティブラーニングや情報リテラシー教育といったキーワードが出てきました。従来は先生が学生に知識を授けるという形式の授業が基本でしたが、今の大学の教育は変化していますね。学生自身が課題を探究して問いをつくるという、能動的な学習の機会も増えています。そんな変化に対して、大学図書館はどのように対応していますか？

PBLや探究型学習を導入した授業では、教科書の内容を理解するだけでなく、自分で問いを設定し、その問いに関する情報を広く収集して、自分なりの見解を示すことが求められます。問題や課題への理

たずねるようになるかもしれない、こうなれば、学生にとっても図書館にとってもよりよいのではないかと感じました。そこで、そのクラスの先生にたずねて授業の中で説明をしてみたら効果があったので、ほかのクラスにも広げていったそうです。

こうした連携のきっかけはいろいろあるところに落ちています。自然体で、いろいろな人と交流したり情報を交換したりする中で、つながりの種が見つかりました。これを丁寧につなげていくことが大切だと思います。

■5050年代に向けてのメッセージをお願いします。

いろいろなことに関心を持ち、関心のアンテナを増やしてください。また、アンテナの感度も高めて欲しいと思います。ひとつの感度を高めることで、他の関心への感度もさらに高まると思います。楽しみながらアンテナを増やして欲しいです。その中で、図書館を利用したり、教員や図書館職員にもたずねたりして、楽しみながら学習や研究を進めて欲しいです。また、在学中に県立図書館や市立図書館、博物館や美術館などを利用する習慣を身につけ、卒業後にも多様な場面で活用してほしいと思います。

『アクティブラーニング・シリーズ』
(全7巻) 溝上慎一監修、東信堂

- 第1巻 アクティブラーニングの技法・授業デザイン
- 第2巻 アクティブラーニングとしてのPBLと探究的な学習
- 第3巻 アクティブラーニングの評価
- 第4巻 高等学校におけるアクティブラーニング：理論編
- 第5巻 高等学校におけるアクティブラーニング：事例編
- 第6巻 アクティブラーニングをどう始めるか
- 第7巻 失敗事例から学ぶ大学でのアクティブラーニング

【長澤多代先生プロフィール】
三重大学附属図書館研究開発室の准教授。専門分野は図書館情報学で、人文学部の司書課程で「図書館サービス論」、「情報サービス論」、「図書・図書館史」を担当している。研究テーマは、大学教育における教員と図書館員の連携構築で、アメリカ、カナダ、フィンランドの大学のケーススタディに取り組んでいる。



ここから広げよう!!各学部の先生からのオススメ本

READING LIST

教養教育機構 長濱文与 先生

藤田哲也 編著
『絶対役立つ教育心理学：実践の理論、理論を実践』
ミネルヴァ書房、2007年5月出版
【所在】 図・開架・図書
【請求記号】 371.4/F67

教育心理学に関する書籍は多数存在するが、タイトルにもあるように、本書は「理論をいかに実践で活用できるか」という点に重点を置いている。「発達」と「学習」を中心に、理論や概念そして具体的事例が噛み砕いてまとめられている。心理学は身近な人間関係をはじめとする社会生活全般に活用可能な学問である。本書をきっかけに自分の過去・現在・未来を考える一助として欲しい。

生物資源学部 諏訪部圭太 先生

ブレンダ・マドックス[著]；
鹿田昌美訳
『ダークレディと呼ばれて：二重らせん発見とロザリンド・フランクリンの真実』
化学同人、2005年8月出版
【所在】 図・開架・図書／図・書庫
【請求記号】 289.3/F44

DNA二重らせん構造の発見者と聞けば誰もがワトソンとクリックを思い浮かべるであろう。ところで、ワトソン著「二重らせん」でダークレディとされるロザリンド・フランクリンをご存じだろうか？彼女なくして先の発見はなく、本来ならば二重らせん物語の主人公の一人である。それにもかかわらずなぜダークと呼ばれたのか？彼女の豊かな人間性を知るとともに学問界の闇を見た気がする。

工学部 成瀬典 先生

佐藤和也、只野裕一、
下本陽一 著
『はじめての線形代数学：工学基礎』
講談社、2014年8月出版
【所在】 図・開架・図書
【請求記号】 412.3/Sa85

線形代数学の基礎をなす行列は高校の学習内容から削除されたが、行列を用いた解析は工学部をはじめとする多くの学部で必要である。このような状況を考慮し、本書はわかりやすい図や例を多く用いるとともに、冒頭部分では行列の、ロボット、機械、電気システム、構造解析などへの応用も概説している。学習の意味がイメージできる新しいタイプの入門書である。

医学部 成田正明 先生

らせんゆむ 著：
かんもくネット解説
『私はかんもくガール：しゃべりたいのにしゃべれない場面緘黙症のなんがおかしな日常』
合同出版、2015年2月出版
【所在】 図・開架・図書
【請求記号】 378/R17

「場面緘黙（ばめんかんもく）」という状態を聞いたことがあるだろうか。しゃべりたいのにしゃべれない症状。一見理解されにくいためさまざまな誤解を招くこともある。本書は場面緘黙の困り具合をわかりやすく書いてある。必見は克服法。三重生大として必読の書！

教育学部 松本昭彦 先生

加地伸行 著
『儒教とは何か』
中央公論社、1990年10月出版
【所在】 図・開架・図書
【請求記号】 124/Ka22

「儒教は、原儒のシャ머니ズムを基礎にして、孝という独自の概念を生み出し、この孝を基礎にして家族理論を造り、さらにその上に政治理論を造り出し、一つの体系的理論を構成した」と、孔子の儒教の成り立ちを説明し、宗教としての独自性を仏教・道教など他宗教との比較を通して考察する。現代中国社会を知る上でも基本図書の一冊であろう。

人文学部 森原康仁 先生

香山リカ[ほか] 著
『ヒューマンライツ：人権をめぐる旅へ：香山リカ「対談集」』
ころから、2015年12月出版
【所在】 図・開架・図書
【請求記号】 313.19/H99

特定の民族的出自をもつマイノリティにたいする差別が横行している。部落差別も依然として根強い。本書は「現場」で抗議し、支援活動を継続する7人と精神科医の香山リカとの対談集である。ヘイト（差別扇動）街宣に直接抗議する「カウンター」のひとりである青木陽子は、本書で「知識がある人間だけが発言するのではだめだ」と指摘している。大学人はこの言葉を重く受け止める必要がある。